



# 立教セカンドステージ大学

# News Letter mini

# Vol. 5

お問い合わせ

立教セカンドステージ大学(RSSC)事務室

E-mail: rssc@ml.rikkyo.ac.jp TEL: 03-3985-4672

## Oct 2020

## オンラインによる「学び」の可能性

RSSC 教員  
立教大学文学部教授 上田 信



お待たせいたしました。9月、ついにセカンドステージ大学が動き始めました。とはいうものの、必修科目である「学問の世界 A」「ゼミナール・修了論文」以外は対面授業ではなく、オンラインで学ぶことになりました。戸惑われている方もいると思います。しかし、オンラインによるゼミナールや授業には、通常の学びにはないメリットがあります。

場所に縛られず、リラックスした環境で授業に参加できる、それだけではありません。Zoomのチャット機能を活用すれば、質疑応答を視覚的に展開することが可能となります。

参加者全員の同意を得て録画すれば、内容をあとで確認することもできるでしょう。この夏、秋学期開講に先駆けてオンラインで開始したプレ・ゼミナールでは、定時で終了した後に、フリートークの雑談が花開いてました。こうした経験をセカンドステージ大学の教員も蓄積し、オンライン談話室の開設など新たな試みを展開したいと考えています。

インターネットにアクセスできれば、どこからでも開講できるというオンラインの特質を活かし、今後は、たとえばフィールド・現場から発信してみたいと思います。みなさんもスマホを片手に、プラタモリ風のルポを届けることもできるでしょう。

慣れないオンラインで困ったことがありましたら、気楽に相談してください。

## RSSCの一年 清里合宿での活動

RSSCが毎年ゼミ合同合宿を行っているのは、八ヶ岳南麓に広がる清里高原にある清泉寮。そこは、清里建設の父と呼ばれるポール・ラッシュ博士によって設立されたキープ協会が運営する宿泊施設です。ポール・ラッシュ博士は、キリスト教日本聖公会主教の依頼により立教大学教授として教鞭をとり、また戦後の日本復興のため、多くの社会事業に尽力されました。その活動とボランティア精神は、現在まで立教大学に引き継がれています。

このように立教大学と繋がりのある清泉寮で行われる合宿では、清里聖アンデレ教会でのチャプレンの講話や、普段はゼミで指導を行っている教員による専門分野での講演会が行われます。さらに、自然保護観察会や星空観察会など、広大な自然を活かした体験プログラムに参加したり、合間の時間には、懇親会やキャンプファイアー、近隣施設を巡るオプション

ツアーといったレクリエーションも組み込まれます。

都心の賑やかなキャンパスを離れ、広大な自然の中での体験や学びが受講生同士の絆を深め、秋学期に向けての活気に繋がるようです。

例年このような形で合宿が行われてきましたが、これからは、新しい生活様式が求められる今ならではの、またRSSCの魅力が感じられる、進化したスタイルを作っていきたいと思っています。



※各種活動は、感染予防策を講じた安全な形での実施を検討しています。

次回は、「さまざまな学びの場」の予定です。

## RSSC事務室から、キャンパス便り

## 汝自身を知れ ΓΝΩΘΙ ΣΕΑΥΤΟΝ

立教大学池袋図書館は、地下2階～地上3階までの5フロア、最大収蔵冊数200万冊と、国内の大学でも有数の大規模図書館で、教育・研究環境の充実を進めています。エントランスに掲げられた碑銘、ギリシャ語「グノーティ・セアウトン」は、「汝自身を知れ」という意味で、古代ギリシャ都市、デルフォイ(Delphoi)のアポロン神殿入口に刻まれていたとされています。ソクラテスはこの言葉を、「自らの無知を自覚しつつ、なおその魂を高めていくことと捉えた」と伝えられています。

## 「山小屋」の由来 学生が集う食堂の誕生秘話

池袋キャンパス ウィリアムズホール 2 階にある軽食堂、「カフェテリア山小屋」。その名前は、かつて現在のマキムホール(15 号館)辺りにあった、課外活動団体が拠点として使用していた木造建築の通称でした。その名が現在も引き継がれ親しまれています。当初、この建物は校舎として建てられましたが、戦後、課外活動を行う部室が足りなくなり、教室から転用することになりました。すでにこの時には「山小屋」と呼ばれていたようです。その後、主に文科系サークル団体の部室として学生たちに親しまれましたが、1992 年のウィリアムズホール完成に伴い、取り壊されました。



「山小屋」という通称は外観に由来すると言われています。

## コロナ禍で詐欺にあわないための心のコツ

RSSC 教員 香山 リカ  
立教大学現代心理学部教授



私は立教大学現代心理学部の教員だが、時間を捻出して臨床医としての仕事も続けている。現在、精神科と総合診療科という科で患者さんを診ているのだ。

今年になって始まった新型コロナウイルスの感染拡大は、もちろん臨床の場にも大きな影響を与えた。総合診療科では発熱などを訴える人が来て、私も PCR 検査を行ったことがある。「でも、精神科はあまり関係ないでしょう」と思う人もいるようだが、それは違う。「コロナにかかったらどうしよう」「外に出ると感染するのではと不安」「家族の中で予防の意識が違い、衝突が絶えない」「コロナで仕事が減り、経済苦から気持ちが落ち込んだ」など、この感染症と何らかの関連がある悩みやメンタルの症状を訴える人が、いまだに大勢やって来る。

なにせこの感染症は先の見通しがいまだ立っていない。「いつ終わるかわからない不安」ほど、人間にとってストレスになるものはない。

気をつけなければならないのは、社会に不安が広がると、必ずそこにつけ込もうとする人たちが出てくることだ。あるとき、診察室にシニアの女性がやって来た。子どもや孫と離れてひとりで暮らす彼女は、コロナ以降、お互いに感染させては困る、ということで家族との行き来もしていない。同じマンションに住む知り合いが、そんな彼女をなぐさめるために、ときどき食事を作って持ってきてくれるそうだ。

「それはうれしいですが、その人は健康食品の販売の仕事をしていて、なんでもコロナを予防するサプリメントがあるとので、私にも売ってくれたんです。安いものではなかったのですが、子どもや孫にも飲ませたいと思ってたくさん注文しました。そして、家族に送ったら、娘から電話でひどく怒られたんです。こんなのインチキだ、ネットでも問題になってる、お金返してもらいなさいよ、って…。」その女性としてみれば、家族のためと思って、かなり無理をして購入したのだろう。ただ、実際には「コロナを予防するサプリ」があるはずはなく、残念だが彼女は販売員の口ぐるまに乗せられてしまったことになる。

おそらくこの人の場合、「子どもや孫に早く会いたい」という願いやそうできない孤独感があり、サプリを送ることで「さすがおばあちゃん！」とみんなに喜ばれたい、という気持ちもあったのだろう。私が「何かをしてあげたい、というあなたの思いはよくわかりますし、それはご家族もきっとわかってくれますよ」と言うと、彼女はポロポロ涙をこぼした。

いつもと違う生活やいつもと違う心境。その中で不安なのは当然だ。それをなんとかして早く解決しようとしすぎると、思わぬだまし、詐欺、インチキに引っかかって、結果的には損をしてしまうこともある。不安なのはあたりまえ、不安を不安のままにしておく。これはなかなかむずかしいが、とにかく「不安な気持ちの自分を認めること」にしか、コロナ禍を生き抜くコツはないと思う。この状況はきっと終わる。それまでは、いつもと違って不安でいっぱい自分を、ちょっと楽しんでみる。それくらいの気持ちで日々をすごしたいものである。



RSSC での講義の様子

<科目名>「だまし」と「ウソ」の心理学

<教員専門分野>  
精神医学